

# 人痘法受け入れ論争の歴史的意義の再検討-文化ならびに思想の歴史に照らして-

著者	小田 泰子
号	1
学位授与番号	1
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/36843">http://hdl.handle.net/10097/36843</a>

お だ やす こ  
小 田 泰 子

学 位 の 種 類 博 士 (国際文化)

学 位 記 番 号 国博 第 1 号

学位授与年月日 平成10年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科 (博士課程後期 3 年の課程)  
国際文化交流論専攻

学 位 論 文 題 目 人痘法受け入れ論争の歴史的意義の再検討  
－文化ならびに思想の歴史に照らして－

論文審査委員 (主査)

教 授 青 山 隆 夫

教 授 井 原 聰

教 授 成 澤 勝

教 授 平 川 新

教 授 杉 山 滋 郎 (北海道大学)

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 1 研究目的

ペストや天然痘など疫病が古くから人類を悩ませてきたことは、これまでの歴史を見ても明らかである。しかし、疫病の原因となる病原菌やウイルスが存在しているだけで病気となり疫病となるわけではない。病気を伝播し、繁殖させ、発症させる条件があってはじめて疫病となるのである。その条件とは人間が創り出したものであり、当該時代の社会であり、それが属する文明にはかならない。すなわち、それぞれの社会、それぞれの文明は特有の病気の存在様式を持つことになる。時には文明間の交流は病気の交流ともなる。病気は文明と深くかかわり、社会に大きな影響を与えることになる。

したがって、病気は単に一学問領域である医学史、疫病史の中で語りきれるものではなく、人類の国際的交流やそれに伴う文化的交流の歴史に即して語られなければならない。

古代ギリシア・ローマを滅ぼした一因に疫病を数え、また、中世ヨーロッパを襲ったペストによ

る廃墟の上に近世はスタートしたとする見方さえある。病気は文明に大きな影を落とし、また、文明は病気そのものを「変容」させ、病気を「つくる」こともある。そうであれば、病気そのものに「歴史的性格」があるといえる。したがって、病気と人間とのかかわり合いを追跡することは歴史とりわけ文化史・社会史・思想史の研究の分野で重要な仕事のひとつといえよう。

今日では、疾病に対する予防法の受け入れは医学や医療技術の分野の問題である。しかし、疾病の概念はもとより、治療法さえ発達していなかった18世紀の初めには、人痘法の受け入れは単に医学や医術分野の問題ではなく、呪術的要素ともあいまって宗教や倫理、思想とも関わり、さらに近代科学形成期とも重なって、議論は複雑な様相を呈していたといえる。20世紀に入ってさえダーウィンの進化論とその思想がキリスト教の教義に抵触するということで、その説が禁止されていた国があり、アメリカのある州では第二次大戦後に解禁になったところさえある。今日でも宗教によっては教義に反するものとしてしりぞけられている。科学と宗教との関係は古い問題で、すでに解決済みのように考える向きもあるが依然として新しい問題である。

人痘法は人工的に天然痘に罹らせ、天然痘に対する免疫性を獲得させて、疾病を予防するというものであった。18世紀初頭、初期の人痘法は術式の未熟さにより多くの失敗があり、全くなじみのないものであった。また人痘法の理論や効果を測定する合理的方法がなく、19世紀後半になって発展した免疫学の中でようやくそれは説明されるものであった。しかしその免疫学はそもそも人痘法を起源としている。18世紀末に発見された牛痘法は人痘法と深く関連しており、免疫学はこれを起点にしているといってもよい。にもかかわらず、従来から、人痘法の評価は軽視されてきており、史料に基づく人痘法の体系的記述をめざす意義は大きいと考える。

さて、種痘法の歴史についてはこれまでスプレングル、クルークシャンク、クレブス等が論じてはいるものの、人痘法受け入れ論争の内容にまで踏み込んでその背景や歴史的意義を分析してはいない。

本論文では、従来医学史の中で十分な注意が払われてこなかった天然痘の予防法としての人痘法の実態を18世紀のアメリカ、イギリス、フランスを中心に解明するとともに、18～19世紀のわが国でのそれをも検討した。そして医学や医療が当該時代における歴史的条件、社会的、思想的、宗教的問題とどのようなかかわりをもったのかという問題意識を底流に据えながら、人痘法の展開過程を実証的に明らかにしつつ、その歴史的意味を考察することを目的とした。

## 2 研究方法

アメリカ、イギリス、フランス及び日本における先行研究の網羅的調査と新史料の発掘のためにインターネットを利用したデータベース検索を徹底的に実施し、それを手がかりに史料収集のためイエール大学、ハーヴァード大学等をはじめ国内では東北大学狩野文庫、北海道大学北方資料室、

北海道立図書館、広島県立図書館、大阪中之島図書館、米沢市立図書館などの現地調査を行い史料収集に努めた。そして掘り起こした史料の多面的な解析を行い、史料の全訳または要約を紹介し解説を加えるとともに、人痘法の展開を実証的に示すとともに、受け入れ論争を可能な限り復元しそれぞれの特徴を解析した。

### 3 各章の内容

天然痘は、紀元前から地球上に局地的に存在していた疾患の一つであったと考えられるが、人類の移動、戦争、航海術の発達等を背景にして地球全体に拡散した。天然痘に汚染された地域の人々が非汚染地域の人々と接触したときには、非汚染地域の人々に多大な人的被害をもたらした。インカ・アステカ帝国の滅亡の陰に侵略者とともにヨーロッパから持ち込まれた天然痘流行があったことは知られているが、北アメリカへの清教徒の移住と定住にも天然痘が関与した。

第一章においては、これまで、ボストンで人痘法が行われたのは、イギリスで人痘法を推進したレイディ・メアリの影響によるといわれてきたのは誤りであることを、『マザーの日記』とマザーが王立協会に出した手紙の日付から証明した。

また、ボストンにおける人痘法受け入れに際して起きた論争を『マザーの日記』、ボイルストンの著書、ダグラスに関するバロック記述、当時の三新聞、『理学紀要』を元に復元した。特に『理学紀要』に掲載されたニューマンとオズボーン船長の記述はマザーとボイルストンの記述を補足するもので、これによってボストンでの人痘法実施の実体を明らかにすることができた。

さらに、埋もれていた1910年代の研究成果であるクレブス、フィッツ、キットレッジの諸論文等を発掘し、それらの記述に共通した羅列的事実の指摘を具体的内容で補い、かつこれまでそれらに含まれていた各種の錯誤を訂正することができた。

一方、ボストンで行われたダロンドの証言の全文は、ハーヴァード大学図書館蔵のボイルストンの著書の付録にあるもので、この後、イギリス、フランスの人痘法反対論者によって引用された証言で、種痘史研究者にとっても貴重な史料を紹介することができたと考える。

ボストンにおいては人痘法受け入れ論争に一般大衆が参加し、人痘法を行った医師の家を取り囲んだり、人痘法を推進している牧師の家に手投げ弾が投げ込まれるといった実力行使にまで発展した。このような現象はボストン以外の地では起きなかったことであり、ボストンの特徴と考えられる。

新大陸に移住した最初のピューリタンたちの意識では、彼らは自らを「新大陸に新エルサレムを建設するべく神に選ばれたもの」と考えた。新大陸開拓に当たっては多くの困難があったが、「神は彼らが望む以上のパンを与えてくれたばかりでなく、（彼らに反抗する）インディアンに天然痘をはやらせて恐るべき荒廃をもたらした。（このことは）偉大なるエホバの驚くべき働き」である

と初期開拓者は考えた。彼らにあっては「インディアンは悪魔が作ったもの」であった。すなわち、新大陸移住者にとっては天然痘は単なる疾患ではなく、神が与えた「恩寵」の一つと解された。神の恩寵である天然痘を神の子であるピューリタンがインディアンと同様に病むのは、その人の特に罪深い行為の結果によるものと考えられもしたのであろう。神が与えた罰である天然痘を人痘法によって避けることは、神の意志に従わないという点で、神を冒瀆するものと解された。

また、ニューイングランドに移住したピューリタンたちは自分ひとりの行いが正しいだけでは満足できなかった。理想的なピューリタン社会は構成員全員の行いが正しいことによって成立すると考えられた。そのためにピューリタンたちは自分自身の良心・行動を吟味するだけでなく、共同体のメンバー全員の良心・行動をも厳密に吟味した。すなわち、人痘法が神の意に沿わない行為であれば、人痘法を行ったり、受け入れたりする人たちだけの問題ではなく、ピューリタン社会全体に及ぶ問題であった。このことがボストンで人痘法論争に一般住民が参加し、暴動にまでエスカレートした理由であったと考える。ボストンにおける人痘法受け入れにあたっただけでなされた論争を、このような視点で分析したものはこれまでは存在しない。

第二章ではイギリスにおける人痘法受け入れを論じた。イギリスは『理学紀要』で人痘法をヨーロッパに紹介した国であり、王家が積極的な受け入れ姿勢を示したという特徴があった。この章に掲載した『メートランドの報告』で、レイディ・メアリの娘に行われた人痘法、ニューゲート監獄の囚人を使って行った人痘法実験を明らかにするとともに、これまでの記述にメートランドの報告とは矛盾する点のあることを指摘した。

人痘法に反対したマッセイの『危険で罪深い人痘法に反対する説教』とそれを論駁する無名氏の人痘法擁護論『マッセイ牧師への手紙』、ワグスタッフの人痘法反対論『医師フレンドへの手紙』、『メートランドの報告』はこれまでその内容は知られていなかった史料である。これらの史料を発掘したことによって、人痘法受け入れ論争の問題点、論争がなされたころの社会の状況、医学理論、牧師や一般の人々の人痘法に対する考え等を明らかにすることができた。

イギリスではトルコで、人痘法の実際を見聞した外科医メートランドが非常に綿密な人痘法に関する報告を書き、それが多くの人に読まれたと考えられるにもかかわらず、牧師マッセイは人痘法反対の説教を行った。ここでマッセイはヨブを例にして「神は人々の誠実さを試すために病気にするのであるから、ヨブのように耐えなければならない。人痘法で病気を避けることにより、人は神の罰を恐れなくなり、悪しき心が正されなくなり、戒律を犯すことになる。神の意志によらず病気になるたり、それを回避することはキリストの教えに叶っていない。このごろの人はあまりにも自分自身に頼り、神の助けを願わない。人痘法は神の采配に不満を述べる行為である」と非難した。また、マッセイは「主を信じない無神論者、神の支配を非難するもの、神の掟に従わないものをして人痘法を行わせ、そして受けさせなさい。彼らの望みはこの世にしかないのだ」とも言った。こ

れは人痘法を受け入れたイギリス宮廷を非難する言葉でもあった。人痘法受け入れ論争の陰にイギリス国教会と非国教会との確執があったことをうかがわせる。イギリス人の考えの根底にベーコン流の「人間は知識によって自然を支配する。真理と有用性は同じである」という考えがあった以上に、科学革命を経て、近代科学が躍進し始めた時代のプロテスタント知識人は新しい科学に理解を示した。特にイギリス国教会の主流を占めていたプロテスタントにその傾向が強かったといわれているが、人痘法受け入れもその一つのあらわれであったと考えられる。

聖バーソロミュー病院の医師ワグスタッフは人痘法反対論『医師フレンドへの手紙』を書いた。ここでワグスタッフは人痘法の危険と不確実さを述べ「性・年齢・体質・季節等を考慮し、接種に使う膿の性質・量・接種する場所などの実験をしなければならない。人痘法によってうつされる疾患が天然痘かどうかは疑わしいが、何らかの病気がうつされることは確実なようだ。とすれば梅毒・疥癬・気違いといった病気も同時にうつるのではないか。メートランドが人痘法を接種した子供を世話していた召し使いが天然痘に罹り死亡したばかりでなく、その地方に天然痘が流行して交通遮断などの措置がとられ、商業に影響があったと聞いている」と述べた。ワグスタッフは「人痘法を受ける人は、自分の家に放火して周りの家を類焼させるようなものである。その人は自分の家の消火に成功したとしても、周りの家の損害にも責任を負わなければならない」と主張した。現在では新しい治療法を受け入れるに当たっては動物等を使って、用法、用量、副作用等を知り、二重盲検法等によって安全性を確かめた後に人体に適用するのが常識であるが、18世紀の初めに、これらの手順の必要性を主張し、人痘法に対する理論的でない過度の期待を否定したワグスタッフは、結果的に誤った方向に向かっていたとは言え、極めて現実的な理論家で、かつ科学的な考え方ができる医師であったと考える。

第三章ではフランスにおける人痘法の受け入れを述べた。フランスで18世紀初めになされた人痘法受け入れの論争はパリ大学医学部と神学部の間にあった勢力争いの一面を示すものとする。1723年に、フランスでも人痘法受け入れが話題になった。このとき、パリ大学神学部は人痘法の効果を試すために実験を行うことに賛成したが、間もなく、無署名の『人痘法に反対する理由』という論文が出版された。これを書いたのは医学部の校長であるエッケであることが分かった。エッケは「医学部校長という地位にありながら医者というよりは神学者といった方が当たっている新しい改革にはなんでも反対する論争好きな頑固者」と言われるような人であった。結局、1723年の暮れに開かれた医学部の会では実験開始が否決された。フランスでは人痘法の実験開始に神学部が賛成し、医学部が反対したのであった。

これまで、エッケの人痘法反対論の存在は知られていたが、その内容は不明であった。ここにその要約を示すことができた。エッケの反対論はイギリスの医師ワグスタッフの理論と共通している部分もあるが「人痘法の起源が無学な一老女に発することでこれまでの医学書にも記載がない。イ

ギリスが受け入れたからといってもフランスで受け入れることはできない。人痘法に使う材料、接種場所、切開の大きさ、切開の深さ等を十分に検証する必要がある」として、人痘法の天然痘予防効果にも疑念を呈した。また、もっと根元的な問題として「人痘法は血液に毒を入れることで、創造主が人を作ったときに入れ無かったものを人工的に人体に入れることになる。これは神の掟を犯し、キリスト教の教えに反する」とエッケは主張した。

「現在使われている医術の多くは、最初は民間療法として退けられていたものもあり、人痘法に使う膿の量や質はそのうちに決まるであろうし、人体を傷つけるという点では、瀉血・切開・穿刺、下剤・吐剤の投与といった治療と変わるところがない」という意見に対しては、「瀉血や下剤の適応にはルールがあるが人痘法にはない。人痘法は病気のないところに病気を作り出すような術で、これは神意を犯すことになる」とエッケは主張した。医学と宗教には、はっきりと境界がつけられない部分がある。

結局、フランスが人痘法を受け入れたのは医学部が否定してから45年後の1766年になってからであった。その間に、啓蒙思想家であるヴォルテール、ディドロ、ダランベールらが人痘法を支持した。啓蒙思想家が人痘法を支持し推進したことについてはこれまで述べられていない。第四章では日本における人痘法受け入れについて述べた。日本の種痘史を含めた疾病史については富士川游が網羅的に精力的に調べて『日本医学史』にしている。そのほか、人痘法、牛痘法を含めた種痘に関するものも多く出版されている。しかし、これらの著書の多くは牛痘法を推進したある個人の事績を述べているもので、ここで筆者が重点をおいた人痘法・牛痘法の伝達と普及の努力、賛成論、反対論を、文献に基づき書いているものはない。

この論文では、これまでの種痘に関する著述では紹介されなかった司馬江漢の『種痘伝法』、本間棗軒の『種痘活人十全辯』、池田正直の『痘疹戒草』、大槻玄沢の『西賓對晤』、桑田立斎の『牛痘発蒙』等多くの原典を発掘し引用することができた。

中国で行われている人痘法の知識が初めて日本に伝えられたのは1744（延享元）年と言われている。この2年前の1722（享保7）年に、宋の乾隆帝の命令で編纂された医学書『医宋金鑑』が刊行され、それまで秘法とされていた人痘法が公になった。牛痘法の知識もジェンナーが牛痘法に関する本を自費出版してから5年後の1803（享和3）年にはオランダ経由で伝えられた。日本は鎖国をしていたが人痘法・牛痘法の情報の伝達は早かったと言える。しかし、人痘法が日本人により初めて実施された記録は1789（寛政元）年で、それが伝えられてから45年後のことであった。その後来日したオランダ医師のケレルは大槻玄沢らにトルコ式人痘法を教えたが実施されなかったようだ。人痘法の実施が遅れたのは日本の医師・医術が人痘法を評価できるまで進歩していなかったとも考えられるが、牛痘法の実施が遅れたのは鎖国をしていたために有効な牛痘苗の到着が遅れたためであった。このために日本では人痘法の時代が長く続いた。牛痘苗の到着を待つ間に、国産牛痘苗製

造の試みがなされた。このような試みは日本以外の国ではなかったことであった。古来から日本は中国・韓国・オランダ等から外来文化を受け入れ同化させてきていた。外国にあって日本にないものがあれば、それを取り寄せるか、取り寄せられなければ工夫して作り出せばよいという発想が普遍的であったと考えられる。この論文では4例を取り上げた。このような試みに熱心であったのはどちらかというとな漢方医であり、蘭方医は外国からの牛痘苗の取り寄せに熱心で、牛痘苗製造の努力には冷淡であった。

日本人の医師が種痘法の正確な知識を持ったのは、1823（文政6）年にシーボルトが無効ではあったが牛痘苗を持って来日して、日本の医師たちに種痘法の説明をし、実技を教えてからであったと考えられるが、シーボルトが来日する11年前の1812（文政9）年に、「文化丁卯の変」でロシアに連行された中川五郎治がロシアで牛痘法を学び、ロシア語で書かれた牛痘書を持って帰国していた。その本を天文方の馬場佐十郎が翻訳に着手し、1820（文政4）年には『遁花秘訣』として訳も完成していたが、佐十郎がその2年後に病死したこともあって、日本における牛痘法普及の起爆剤とはならなかった。

五郎治は蝦夷で、シーボルトが来日した翌年の1824（文政7）年に種痘を実施していた。これは医師以外の方が種痘を広く一般人に行った記録がある唯一の例である。五郎治の種痘は上総佐貫の井上宗端を通じて安芸の三宅春齡、五郎治の種痘を受けた白鳥雄蔵を通して京都の目野鼎哉・福井の笠原良策らの知るところとなり、秋田藩では広く巡回種痘を行ったが、五郎治の種痘も牛痘法普及への原動力とはならなかった。

1830年以降になって大村藩の長与俊達が行い、水戸の本間棗軒は1846（弘化3）年に人痘法普及の啓蒙書『種痘活人十全辯』を出版した。

外国から牛痘苗を取り寄せる努力は引き続いて行われ、1849（嘉永2）年になって日本に有効な牛痘苗が到来した。日本に牛痘苗が到来したのは遅かったが、それを待つ間にも人痘法は広くは普及しなかったために、牛痘苗が到来してから、本格的な種痘法普及の努力がなされた。桑田立斎が書いた種痘啓蒙書『牛痘発蒙』には当時の幕府の洋学禁止令のもとで、一般人が西洋をどのように見ていたかの一端をうかがい知ることができると考える。

#### 4 まとめ

1）人痘法受け入れ論争の中に、今日の医の倫理として話題になっている事柄、例えば臓器移植、遺伝子治療、出生前遺伝子診断、クローン動物の誕生などについてなされる論争のプロトタイプがほぼ出尽くしていると考えられる。

例えば臓器移植においては、他者の臓器を体内に入れるという臓器移植術に付随する根本問題について、それが許されることなのであろうか、という意見がある。さらに臓器を提供する側の人権、



その人の死をどのように規定するか、心臓死か、脳死かも大きな論議を呼んでいる。政府はこれを脳死臨調をつくって検討したが、まだ、多くの人の賛同を得るに至っていない。

2) 人痘法を行うかどうかは、疾病の予防治療という点で今日的には一医学領域の問題ではあるが、18世紀においては論者の社会的地位―牧師・医師・外科医などを反映し、医学外の評価や論点、人痘法が発見されたところの気候・風土、それを行ったり、人痘法を受け入れていた人たちの社会的地位、生活習慣、環境等を問題にして論争が展開された。

3) 宗教の教義と人痘法との調和をどのように図るかは、医師も宗教家も問題にした。医学と宗教とは完全に分けられない一面を持っている。この点について、ある人は創造主が関与しないものを人体に入れることはキリスト教の教えにもとると言い、ある人は神が与えてくれた治療法と解釈した。

4) 人痘法が行われていた所はイスラム教圏に近いところであり、それを受け入れていた人たちがどちらかという下層階級に属していたことも、人痘法受け入れ論争に影響を与えた。

ワグスタッフやエッケらは、これを行っていた人が無学な女性で、受け入れていた人たちは食事が粗末で栄養状態が悪く、そのために彼らの血液は感染を受けにくい、ワインを飲み、贅沢な食事をしているイギリス人、フランス人の血液は栄養が豊富で感染を受けやすいので、人痘法を行うのは不適當であると強調した。また、ボストンでは「マホメット教の一団であるアフリカ人を使って人痘法を神の教えに叶うものとすることは、マホメット教を真の宗教だと証明するようなものだ」という意見も聞かれた。

5) 医学に欠かすことのできない人体実験の問題、定量的・定性的術式の確立の必要性、結果の判定などに関する問題についても検討された。しかし、病原微生物といった概念もまだなかった時代であった。人痘接種に使う膿の中に含まれているらしいものがなんであるか、それが人体にもたらす作用も判然としていなかった。現在の医学では当然とされる定性・定量的考察は望むべくもなかったが、それでも、経験的に人痘法の術式は徐々に確立されていった。

6) 人痘法に関するさまざまな情報が世界のあちこちで飛び交い、18世紀世界の貴重な断面を提示している。例えば、イギリスの『理学紀要』が各国で読まれたのはもとより、新大陸アメリカの情報はそのままヨーロッパに伝えられ、イギリスのメートランド、マッセイ、ワグスタッフ等が書いたものすべてはフランスにおける初期の人痘法論争に影響を与えた。さらに、中国にいたイエズス会宣教師、南米のカルメリート会宣教師にも人痘法の情報は行き渡っていた。イギリスにおける人痘法術式の改良は、啓蒙思想家ヴォルテールの働きもあって、ロシア宮廷の人痘法受け入れとなって現れた。このことはまた、フランスの人痘法受け入れにも影響を与えた。

7) この論文で紹介した人痘法受け入れ論争は、当時の牧師・医師・外科医らによる真摯な考察の結果であり、病気と社会、病気と文明、病気と歴史…といった問題視点に豊かな歴史的描像を与え

てくれるものとする。

8) 日本における種痘法受け入れに当たっては、ヨーロッパにおけるような学術雑誌も新聞もなかった当時あって、広い範囲の情報網ができていたこと、また、人々の行動半径の大きさを示す貴重な資料を提示できたと考える。例えば、蝦夷にいた中川五郎治の種痘は佐貫の井上宗端、安芸の三宅春齡、京都の日野鼎哉の知るところとなったし、五郎治から種痘を受けた白鳥雄蔵は少なくとも二度、箱館－京都間を往復した。井上宗端も箱館まで行ったと言っている。1849（嘉永2）年に長崎に届いた牛痘苗はその年のうちに全国の主だった種痘医の元に届けられた。

9) 従来、日本で種痘法を推進したのは蘭方医で、漢方医はすべて種痘法に反対したかのような印象が持たれていたようだが、種痘法を推進し実践した人の中には、多くの漢方医がいた。

10) 人痘法受け入れ論争という新しい切り口を通して18世紀ヨーロッパと日本の一つの側面を明らかにできた。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、医学史・医療史上、単なる牛痘法の前史として顧みられることのなかった人痘法を、18世紀アメリカとヨーロッパにおける受け入れ論争を軸にすえて、医学と宗教、社会等との関連から、これまで埋もれていた資料を、分析し、従来の人痘法をめぐる記述の混乱をただす等して、総合的に考察した視点が評価される。すなわち、ボストン（アメリカ）での論争では、新大陸移住者のピューリタニズムが重要なファクターであったこと、イギリスの論争においては、国教会と非国教会との確執が背後にあったこと、フランスの論争・対立においては、パリ大学の医学部と神学部との勢力争いが側面にあったことなどを指摘し、人痘法をめぐる論争が、単に自然科学（医学）上の対立でなく、まさに文化・思想的な分脈のなかで展開されたことを検証している。その際、論争の復元には新たに発掘された資料を用い、説得力のある論述を展開している。

さらに日本における人痘法受け入れに関して、小山肆成や井上宗端等の具体的な例をあげて、江戸時代に種痘法を推進したのはもっぱら蘭方医であったという通説に対し、少なからぬ漢方医も種痘法を推進・実践していたという事実を、資料にもとづいて指摘し、従来の蘭方医と漢方医の位置づけに修正を迫る大きな成果をあげている。ややもすれば、従来の研究が種痘法にそれぞれの役割をはたした人物の個人史にとどまりがちであったり、あるいは地域医療史の分脈のなかでのみ位置づけられたのに対し、本論文では従来あまり評価されてこなかった人物の再評価や、いくつかの新しい資料や知見を加えて、種痘法受容の過程を体系的に位置づけようとするもので、学術の総合化という点において、従来の研究に依拠する側面もあるが、人痘法や牛痘法の受容に関わる新たな人物

や事実の発掘という作業に加えて、人痘法や牛痘法受容の裾野の広さを改めて提示したこと、あるいは人痘法から牛痘法への転換の図式を、これらの人物の役割とからめて見通したことなども、新たな知見として評価できる。

また治療法の有効性をどのように判定するかという問題、種痘法を社会的に強制したときの「人権」の問題等、現代の医療においても重要な問題が、人痘法をめぐってすでに論じられていることを指摘するなど、現代的な問題への関心が随所にみられ、示唆に富む。

この論文は、学の探求の過程における論文のとりまとめであるために、必ずしも全ての事項や対象に目配りできているわけではなく、提示された資料や事実をもってしても、なお新知見を加えることが可能な余地を残している。だが全体としてみれば、洋の東西における種痘をめぐる歴史を再解釈する意義をもっている。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。